

脊髄損傷：受傷前に結婚していたものと受傷後に結婚したものととの比較

Spinal cord injury: A comparison of preinjury and postinjury marriage/Crewe, N.M., et al: Arch. Phys. Med. & Rehabil., **60**, 252-256, 1979.

【結婚生活，離婚率，性機能】

55人の脊損者の結婚生活について，受傷前から結婚していた者と，受傷後に結婚した者との比較を中心に調査研究した。

調査内容は日常生活動作の依存度，生活に対する満足度，健康状態，仕事に対する態度，夫婦関係等である。

その結果，受傷前から結婚していた者では，日常生活動作の依存度が高く，そのパートナーから介助を受けている割合が大きかった。また，生活に対する満足度でも，社会生活と性生活においてやや低い傾向を示した。これに対し，受傷後に結婚した者では，健康状態が良好であり，心理的にも良く適合していた。さらに夫婦関係においても，インタビューによる調査からより幸福であると判定され，離婚率についてもその割合は低かった。

これらの結果より，受傷後に結婚した者の方が，全体としてより幸福な生活を送っているようだと言われている。（横浜市大 伊藤 利之）

障害者の性行動に対する大学生の認識

Attitudes of college students toward sexual behavior of disabled persons/Haring M. et al.: Arch. Phys. Med. Rehabil. **60**, 257-260, 1979.

【性行動，身体障害者】

健常な大学生が，身体障害者の性行動をどのように認識しているかを調べるために，110名の大学生に文章完成テストを実施した。このテストは，「女の身障者の性機能についてエディスは……」などの性行動に関する項目を18項目含んでいる。回答者に，第一印象のひらめきで即座に文章を完成するように指示した。設問項目の性行動を肯定的に受けとめた回答を positive，その反対の回答を negative と判定した。negative な回答は positive よりも回答時間が短かった。

身障者の性行動に対する認識と，健常者のそれに対する認識を比較するために χ^2 検定を行い，さらに，性行動に関する18項目の順位分析を行った。結果として，健常者の性行動に比し，身障者の性行動は同性愛を除いて容認されておらず，性行動に関する positive な回答の

第9位までが身障者の性行動に関する項目であった。従って，健常な大学生でさえも，身障者に対して“性解放”に至っていない。（横浜市大 佐藤 博信）

新生児の脊髄損傷

Neonatal spinal cord injury/Koch, B.M. & Eng, G. M.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., **60**, 378-381, 1979.

【分娩外傷，脊損】

自験例3，文献例11，計14例の新生児頸髄損傷に関する報告である。受傷機転はいずれも産科的合併症に関連がある。妊娠末期に横位とり，頸椎過伸展位にあった場合や，骨盤位での分娩経過中に頭部が子宮内に残ったまま下肢を牽引し頸椎の伸展，回旋を行った場合に生じやすく，75%は鉗子分娩に合併している。臨床所見としては呼吸障害，四肢の低緊張，神経因性膀胱などを呈し，経過中に気道感染，尿路感染，体温調節障害をみることが多い。予後は損傷高位と密接し，14例中死亡した8例はほとんど中部頸髄以上の損傷例であった。2歳以上の生存例は6例で，1例を除き C₈より低位の損傷であった。一般に早期に弛緩性から痙攣性に転ずるものは予後良好でリハビリテーションの対象となるが，脳性麻痺，両側分娩麻痺との鑑別に留意する。分娩中に強引な牽引を避けること，生直後から intensive care を行うことが，本症の対策として重要である。

（こども医療センター 陣内 一保）

施設老人の顔—手テスト成績に与える環境の影響

Environment and face—hand test performance in the institutionalized elderly/Mishara, B.L.: J. Gerontology, **34**, 692-696, 1979.

【環境，施設老人，顔—手テスト】

脳に器質的な障害をもち，改善の見込みなしとして，精神施設に長年月（平均21.4年間）収容されている60歳以上の老人（平均70.4歳）45例を15例ずつ3群に分けて，これらに顔—手テスト（FH テスト）（顔と手を同時に指尖，針尖などで触れ，部位をあてさせるもので，皮質とくに頭頂葉障害で手の消去現象が出る。高齢者でも可能で神経心理学的意義をもつ）を行い，誤り反応について9カ月間の経過を観察した。

I 群：健常人同様の環境におき，3度の食事以外にも好きなように食べさせ，衣類も自由に選ばせ，プログラムの豊富な楽しい雰囲気におく。II 群：日常の働きぶ

り、態度、身の回り動作の成績に応じて代用貨幣を与え、それで余分の食物や衣類を買わせる。Ⅲ群：3度の食事以外はテレビのみが娯楽として許される。

当初のFHテストでは各群に差がみられなかったが9ヵ月後には明らかに差が出現し、Ⅰ群では有意にFHテ

ストの誤反応が減少したのにたいし、Ⅱ群では有意な変化はなく、Ⅲ群では誤反応が増加した。

これらのことは症状固定と考えられる老齢施設収容患者も環境いかにによって、神経心理学的反応が変りうるものであることを示している。(七沢病院 福井 閑彦)

ニュース

「動力義足」国で開発へ 4年計画

動力義足・装具を開発、実用化する計画が、55年度から4年間の目標でスタートする。通産省・工業技術院が開発目標の概要をまとめた。

これによると、足を完全に失っている人のための義足は、①5キログラム程度以下の重さで、電池などのエネルギー源は1日分(約4,000歩)をまかなう、②健康な人に近い歩き方で、階段や傾斜地で動くことができる、

③日本人の生活様式に適し、正座やあぐら、しゃがみ込むことができる——などの機能を持たせる。足がマヒした人のため足の外側につける装具も、同様の機能が要求される。

義足、装具のいずれも、本人の体格や体種、筋肉の力に合わせていろいろな組み合わせを可能にし、本人の筋肉から出る電気信号で動くようにする。

(「読売新聞」3月30日)